

# 平成 22 年度 第 1 回礼文町生物多様性地域戦略策定検討委員会札幌ミーティング

## 議事概要

日 時 平成 23 年 1 月 29 日 (土) 10:00 ~ 12:45  
場 所 独立行政法人森林総合研究所北海道支所 2 階 小会議室  
出席者 < 委員 >  
宮本委員長代理、村上委員、河原委員、高橋委員、杉浦委員、愛甲委員、八巻委員  
< オブザーバー >  
坂本統括自然保護企画官・千田上席自然保護官 (環境省北海道地方環境事務所) 庄子准教授 (北海道大学大学院農学研究院)  
< 事務局 >  
礼文町産業課、株式会社ライヴ環境計画

### 1 事務局より札幌ミーティングの位置づけの説明

#### 【自己紹介】

- 委員及びオブザーバー自己紹介。

### 2 議題

#### オブザーバーの追加

- 事務局より北海道大学大学院農学研究院の庄子准教授がオブザーバーとして参加されることを報告。
- 礼文町島生物多様性地域戦略 (以下、「戦略」) は、教育との関連も重要と考えていることから、次回の検討委員会から町の教育関係者も委員として追加する考えを報告。

#### (宮本委員)

- 北海学園大学の佐藤謙教授を委員として推薦したい。佐藤先生は礼文島の植物を広域で調査されており、今後の資料提供など協力をいただけたらと思う。

#### (河原委員)

- いろいろな立場、知見を持った人が委員として入ることは良いと考える。

#### (高橋委員)

- 委員とオブザーバーの違いはどのように考えればいいのか。島外の委員が多くなり、札幌ミーティングの位置づけはどのようにするのか。

#### (事務局)

- オブザーバーは関係行政機関、委員は研究者など知見のある方、としている。事務的には、オブザーバーの方には会議参加の費用など負担いただいている。
- 現段階では島外の委員が多くなっているが、戦略は外部からの意見でつくりあげるものとは考えていない。島内でフレームをつくり、それに対する意見をいただきたいと考えている。

## 生物多様性地域戦略を「いきものつながりプロジェクト」と表現することについて

### (事務局)

- 生物多様性という言葉が一般に浸透しておらず、今後広げていくことが難しい。一般にもなじみやすい言葉で、ニックネームやキャッチフレーズをつけ、「礼文島いきものつながりプロジェクト」としたい。〈意義なし〉

### 第1回検討委員会の内容確認

- 事務局より、第1回検討会の議事概要を既に送付していること、インターネットで公表していることを確認。
- Eメール等を活用しながら、提案書により質問・意見を含め提案を受け付けることを確認。

### ガイドラインについて

- 事務局より、ガイドラインの構成について説明。国が示した枠組みに沿っている。既に策定した他地域もほぼ同様の構成である。
- 事務局が準備しているパンフレットは、島外の観光客向けと島内向けの2種類。島外の観光客向けでは、礼文島の生物多様性の紹介や「礼文島いきものつながりプロジェクト」のアクションプランの項目、島から滞在に際してお願いしたいことを掲載する。島内向けでは、小学校高学年程度を対象としたわかりやすい表現でまとめる。次回委員会までには、概ね出来上がる予定。ある程度形になった時点で、委員にもご確認いただきたい。
- 事務局より、資料「礼文町いきものつながりプロジェクトの概要(礼文町生物多様性地域戦略のガイドライン/2011.1.29版)」を説明し、委員から各項目について以下のような意見等をいただいた。

### <1-1. 戦略策定の背景>

#### (八巻委員)

- 海域について、詳しく踏み込むかは別として、背景として触れておかなければ、礼文島の戦略としては不完全な印象である。

#### (愛甲委員)

- あえて海域をはずすのではなく、今後の見直しで「充実させていく分野」としてとらえればよいと考える。

#### (宮本委員)

- 島内で大きな割合を占める水産業に従事する島民にも理解を求めていくことがこの戦略策定の大きな意味だと考える。身近な話題につなげていけば理解も得やすい。水産業との関わりを研究する研究者を委員に入れることも考えられるのではないか。

#### (愛甲委員)

- 戦略策定の背景では、現況の課題(例えば「いきものつながりが失われつつある」など)をふまえる形で、戦略策定の必要性を述べる必要があると思う。

## <1-2. 戦略の位置づけ>

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 戦略の位置づけとして、生物多様性国家戦略が最上位となるが、国家戦略は5年ごとに科学的知見をふまえて見直される能動的なものであることをふまえて考えてほしい。
- 生物多様性を考えると、将来的には、礼文島から周辺海域、利尻島などを含めて考えることが望ましいが、まずは第一歩として陸域、レブンアツモリソウから始め、これからの広がり核となるものとして捉えてはどうか。

(八巻委員)

- まず長期的な目標を定め、その長期的目標に近づくための具体的な計画を中短期(5年程度)で策定していくのが妥当と考える。

(杉浦委員)

- まずは、成果が目に見えてくるであろう時期を考えて目標とする時期を設定するのがよいと考える。

(河原委員)

- 理想とする将来像をどこかに示す必要があるのではないか。

## <2-1. 礼文島における生きものつながりの現状と課題>

(八巻委員)

- 国立公園の利用に対する取り組みが取り上げられているが、国立公園は島の一部である。その他の部分や森林はどのような位置づけか？林野庁などの取り組みは含まれないのか？

(事務局)

- 後の項で触れるが、島全域でのランドデザインを示していきたいと考えている。島の土地所有の大きな割合を占める林野庁も戦略策定検討委員会のオブザーバーとして参加しており、森林も戦略で扱う対象と考えている。

(宮本委員)

- いきものつながりに迫る危機には、人間活動が生物多様性に影響していることだけでなく、生物多様性を失うことが人間の産業の衰退につながる、という視点も加えたほうがよいのではないか。
- 危機の具体例として、礼文島で問題となっているセイヨウタンポポ、アカツメクサや、島外から導入されたイタチの影響など、実際に礼文島に影響を及ぼしたと考えられるものを明らかにして示した方が、実感がわくのではないか。
- 海岸漂着ゴミについて、これからの取り組みで再資源化の可能性など示せたらいい。漂着ゴミは、小さく分解されていくと生物に悪影響があるとの報告もある。

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 地域の人々の理解を得るためには、これまで礼文島の生活がどのように発展し、生物多様性に影響してきたかに関連づけることが必要ではないか。「2-1-2.いきものつながりの恵み」をしっかり整理することが重要だと思う。

(八巻委員)

- これまでの流れを共有することで共通認識が生まれると思う。

<2-2. 課題>

(河原委員)

- 迫る危機については、島民にわかりやすいよう具体的な記述をすべき。地域産業への危機が若者の減少、ひいては礼文島の人口減少につながるなど、住民目線で危機を示してはどうか。

(高橋委員)

- 町民が戦略策定のプロセスに参加していくことが大切だと考える。
- 住民が感じている「礼文島らしさ(文化・景観)」を再認識してもらい、それが礼文島のいきものつながりとどのように関係しているかに、ひきつけていってはどうか。
- 住民が感じる「礼文島らしさ」をアンケートなどで調査し、調査を通じて「らしさ」の再確認をしてもらうとともに、戦略の策定が進められていることを知ってもらえる。

(千田上席自然保護官：オブザーバー)

- 地域の価値を共通認識にすることで、「危機」を身近に感じることができるのではないかな。

(愛甲委員)

- 「2-1-2.礼文島のいきものつながりの恵み」の内容をふくらませ、礼文島が受けている生態系サービスを具体的に示すことがよい。また必要であれば、どんな恵みを受けているかを明らかにする調査も実施してはどうか。

(村上委員)

- 一般論ではなく、島のいきものつながりを見せてほしい。

(杉浦委員)

- 島民が恵みと考えているものを明らかにすることで、この戦略への興味を引き出していくことができるのではないかな。
- 昔話を聞くことが、島民の礼文島に対する意識を知るきっかけになるのでは？

(高橋委員)

- 島民に聞くことが難しければ、役場の職員に島の住民としてアンケートに答えてもらってはどうか。そこから大きな広がりになるのではないかな。

(八巻委員)

- 現時点では、住民は戦略策定が進んでいることは知らないだろう。このプロジェクト主催でのフォーラムやワークショップを開催してはどうか。

(村上委員)

- 毎年フォーラムを開催しているが、町民の参加は少ないのが現状である。

(愛甲委員)

- いきなりフォーラムなどに島民の参加を募ることが難しいのは確か。策定する戦略の中に島民の共感を得られやすいメッセージを入れておくことが重要と考える。100人へアンケートをとることが難しいのであれば、10人に聞き取るなどでも十分だと思う。

(杉浦委員)

- 「恵み」に対する住民の思い・考えを抽出するプロセスは避けて通れないのではないかな？ 少人数からでも島民の考える「礼文島らしさ」の情報を集めてみてはどうか。

(河原委員)

- 直接聞き取ったり、古い写真を見ながら当時の話を聞いたりするのもよいと思う。

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 過去の事例から未来の展望を示せば説得力のあるものになる。

<2-4. 目標>

(杉浦委員)

- 「いきものつながり」のシンボルとしてレブンアツモリソウを掲げるとあるが、レブンアツモリソウは自然保護・保全の中心だった。従来の自然保護とは異なる「いきものつながり」のシンボルとしてはふさわしくないのではないか。
- 「レブンアツモリソウの咲く風景」など、「いきものつながり」を意識させるように、レブンアツモリソウだけが注目されない表現がよいのでは。

(宮本委員)

- 陸域から海につながるシンボルはないか。

(愛甲委員)

- 目標と方針(次項)に示す内容の違いはどのようなものか？目標にはメッセージのような大きく捉えたもので、方針にはより具体的なものを示すと良いのではないか。

(河原委員)

- 目標には、これから構築する『人と自然の共生を含めた「いきものつながり」』を入れてはどうか。

(八巻委員)

- 戦略の主軸は「自然そのもの」ではなく、「自然と人の関わり」に置くことでよいか。

(宮本委員)

- 「いきものつながり」という言葉には、人の関わりが見えづらい。

<3. 基本方針、4. 施策>

- 事務局より、「3.基本方針」「4.施策」については、今後、課題の整理や基本的な考え方・目標の検討を進めながら、内容を詰めていくことを説明。〈質問・意見はなし〉

<5-1. 推進体制>

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- まずは、この戦略の策定を進めている町行政が主体としてあり、その次に産業としての市民(事業者)の関わり、さらに島の住民としての関わりとの3つの連携を基本として進め、さらに研究者や島外の関係者と連携を広げて進めていくのがよいのでは。

(杉浦委員)

- 研究者として、独立させる必要はなく、多様な主体との連携というようなところに分類されるのではないか。
- もうひとつの分け方としては、町レベル(町の役割)や個人レベル(住民一人ひとりの役割) または、職業などで町の中で主体を分類するなどして、島民一人ひとりが心がけること、役割が認識しやすいのではないか。

(愛甲委員)

- 事業者は島外・島内それぞれにあるので、島外・島内に分けておいた方がよい。
- さらに観光客のような訪問者という存在があると思う。
- 戦略を推進していくのは町である。その他、研究者や島外からの訪問者はその戦略に協力・参加する立場であると思う。

(村上委員)

- 施策を実施していくためには予算が必要となるが、資金調達についてはこの戦略の中で触れられるのか。

(坂本統括自然保護企画官：オブザーバー)

- 戦略はあくまで計画であり、事業は計画の考え方に基づいて方針がたてられ、実施されていくものである。予算についても事業ごとに計画されるのが基本である。

その他

- 事務局より普及啓発資料印刷までのスケジュールについて説明。
- 第2回札幌ミーティングは、2月17日(木)に環境省北海道地方環境事務所の会議室で開催する。
- 第2回検討委員会(礼文島会議)は、2月28日(月)を予定。改めてメール等でご案内する。

### 3 委員長挨拶

- 宮本委員長代理より閉会の挨拶。

以上